

社会の構造を捉え、よりよい社会を考える生徒が育つ社会科学習

－ システム思考を用いた構造的理解を通して －

名古屋市立富士中学校教諭 山本亮介

I 研究のねらい

過疎化の進行を防ぐために1番必要なことは、交通網を整備すること。過疎化の原因は、過疎地域の産業の衰退による収入面の不安や地域の魅力低下である。その問題を解決するため、交通網を整備すると、土地代の安い過疎地域に企業の工場が移転しやすくなり、産業が発展しやすくなる。するとそこに可能性を見いだした若者たちが集まり、さらに産業が発展する。するとさらに人が集まる好循環が生まれる。

これは、中学校地理的分野「日本の諸地域」の単元における生徒の記述である。この生徒は「過疎問題」の解決のために、過疎化の原因を分析した上で、出来事に関連性を踏まえてまとめている。私が考える「社会の構造を捉え、よりよい社会を考える生徒」とは、この生徒のように、社会の構造を理解し、課題の原因を捉えた上で、よりよい社会の実現に向けて大切にすべき考え方を、様々な考え方を踏まえてまとめることができる生徒である。中央教育審議会『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」では、「目の前の事象から解決すべき課題を見いだし、(中略)納得解を生み出すこと」が求められていると記し、与えられた課題を考えるだけでなく、自ら課題を見いだす力と、解決策を構想する力を生徒が育むことを重要視している。

そこで、自ら課題を見いだすために、ピーター・センゲ氏が世界的に広めたシステム思考に注目した。システム思考とは、「複雑な状況下で変化に影響を与える構造を見極め、様々な要因のつながりと相互作用を理解することで、全体を動的に捉え、社会を俯瞰して見るためのアプローチ」である。システム思考の手法を活用し、社会の問題の構造を分析し、どのような要因のつながりで社会の課題が起きているのかを理解し、解決すべき課題を見いだすことを目指す。生徒が社会的事象の相互の結び付きに注目し、よりよい社会を考える本研究は、社会科のねらいである公民的資質の育成に寄与する点で意義深いと考える。

II 研究の方法

1 研究の対象 名古屋市立富士中学校 第3学年 40人

2 基本的な考え

主題に迫るために、生徒が社会の課題とのつながりを意識し、社会が抱える課題の複雑な構造を捉え、どこに課題解決の糸口があるのかを他者と話し合うことを通して、様々な考え方を踏まえたよりよい社会を考えることができるように段階的に学習を進める必要があると考えた。そこで、「課題を捉える」「社会の構造を分析する」「解決を考える」という3段階の学習過程を設定した【資料1】。

段階	主な学習活動
課題を捉える	① 社会の課題と自身との関連性を捉える。
社会の構造を分析する	② 社会の課題を要素に分解し、関連性を可視化するために、ウェビングマップにまとめる。
	③ ウェビングマップから、因果関係に注目し、「構造分析シート」を作成する。
	④ 互いのシートを見比べ、内容を修正する。
解決を考える	⑤ 「構造分析シート」を根拠にし、理由を明確にした上で学習課題に対する考えをもつ。
	⑥ 学習課題に対して異なる考えの生徒同士で話し合い、それぞれの考えの共通点を明らかにする。
	⑦ 話し合いで明らかになった、解決に向けての考え方を基に、「構造分析シート」を参考にしながら、よりよい社会の実現に向けて大切にすべき考え方考えをまとめる。

【資料1 基本的な学習過程】

(1) 課題を捉える段階

社会で起きている課題と生徒自身とのつながりを意識して課題を捉えるために、生徒と課題との関連性が具体的に理解しやすい資料を提示する。そして、生徒が社会の課題を自分事として捉えた課題を学習課題として設定する。

(2) 社会の構造を分析する段階

生徒が社会の構造を捉えるためには、学習課題に関わる社会問題を要素(キーワード)に分解し、その関連性を可視化することが必要であると考え、「構造分析シート」を活用する【資料2】。「構造分析シート」とは、社会問題が起きている背景を様々な視点から分析し、その関連性を図示するものである。「問題が起きている原因は何か？」を常に自分たちで問い直すことで、社会問題全体を俯瞰し、表面的ではない社会の構造に隠された課題の原因を見いだしやすくなると考えた。

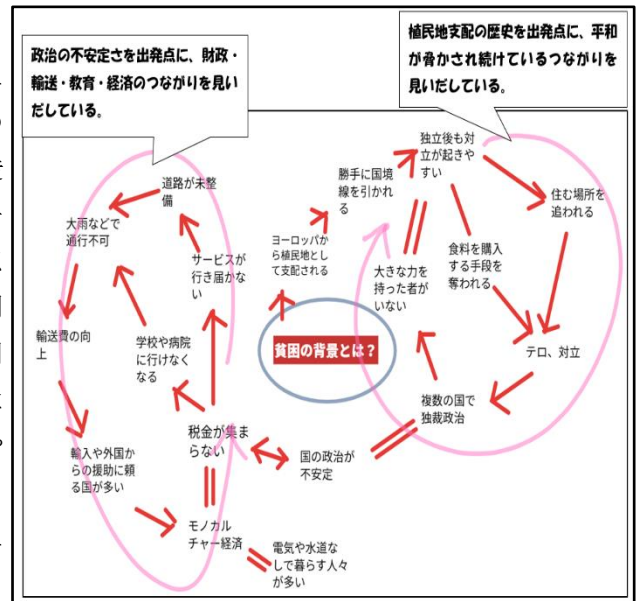
まず、相関関係・因果関係を考えずに学習課題に関わる社会問題の要素(キーワード)を線で結び、ウェビングマップを作成する。その後、社会問題を引き起こしている因果関係に注目し、因果関係を示している箇所に矢印を書き加える。この作業を通して、社会の構造を明らかにしていく。その後、互いの構造分析シートを見比べ、「因果関係は正しいか」「論理の飛躍は起きていないか」「他の視点を見落としているか」といった観点で意見交換し、互いの構造分析シートを修正することで、より正確に社会の構造を捉えることができると考えた。

(3) 解決を考える段階

「社会の構造を分析する段階」で明らかにした社会の構造を踏まえ、学習課題に対しての解決の糸口がどこか、「構造分析シート」を根拠としてまとめる活動を設定する。その後、課題解決に向けて必要な考え方を見いだすために、異なる意見をもっている生徒同士の話し合い活動を設定し、意見は違っても共感できる考え方(=課題解決に向けて大切にすべき考え方)に気付くことができるようにする。最後に、話し合いで明らかになった「よりよい社会」を実現するために大切にすべき考え方をまとめることで、社会の構造に目を向けながら課題の原因を捉えた上で、様々な考え方を踏まえたよりよい社会を考えることができる生徒を育てたいと考えた【資料3】。

3 授業研究を通して明らかにしたいこと

(1) 「社会の構造を分析する段階」において、社会の構造を可視化させることは、社会的事象を理解す



【資料2 構造分析シート】

学習課題: アフリカの貧困を解決するために必要なことは何か?

構造分析シートを見ると、食料の不安定さが児童の労働につながっている。食料問題を解決すべきだ。

異なる意見をもつ生徒との話し合い

【他の意見】教育に力を入れることで、現地の人が自分たちの力で発展ができる。将来の安定した収入や医療の発達につながるはず。

【他の意見】食料問題や教育が解決しても、交通網が整っていないと、経済的な発展は難しい。将来を考えて、交通網の発展が必要だと思う。

そうか、「現地の人々の自立」や「将来を見据えた発展」が大切だね!

社会の構造に目を向けながら課題の原因を捉えた上で、様々な考え方を踏まえたよりよい社会について考える生徒の姿

【資料3 解決を考える段階の学習の流れ】

る上で有効か、記述内容からつかむ。

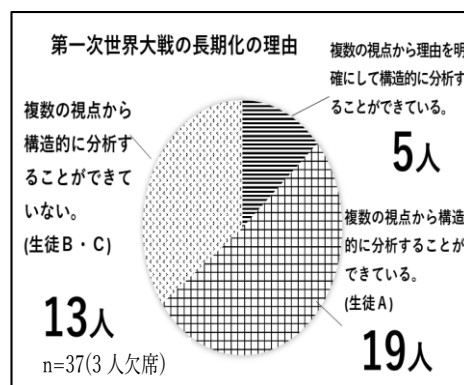
- (2) 「解決を考える段階」において、社会の構造を根拠とした課題解決の糸口を考え、話し合い活動を設定し、課題の解決に向けて大切にすべき考え方に気付くことは、よりよい社会を考える上で有効か、記述内容からつかむ。

Ⅲ 生徒の実態

- 1 調査日 5月22日～6月7日
- 2 調査方法 授業の記述分析
- 3 調査対象 名古屋市立富士中学校 第3学年 40人
- 4 調査の結果と考察

(1) 社会の構造を捉えることができるかについて

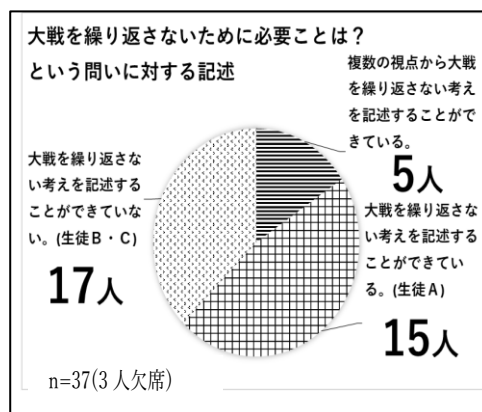
単元「第一次世界大戦」では、「参戦した国々が短期間で終わると思っていた第一次世界大戦はなぜ、長期化したのか」を問い、理由を記述させると、右のような結果になった【資料4】。長期化した理由を「帝国主義」の政治的背景、「複数国にまたがる同盟関係」の外交的背景や「総力戦」となった軍事的背景といった、複数の背景に目を向けて社会の構造を捉えることができた生徒は37人中24人であった。そのため、社会的事象のつながりに注目させ、その関連性を可視化することで、生徒が社会の構造を捉えることができるような工夫が必要だと考える。



【資料4 第一次世界大戦の長期化の理由の記述分析】

(2) よりよい社会の在り方を考えることができるかについて

単元「第一次世界大戦」において、「世界大戦を繰り返さないためには何が必要か」を問い、個人の考えを記述させると、右のような結果になった【資料5】。「国際的な同盟関係を解消する必要がある」「同盟関係では対立が生まれるため、国際社会が協力する体制をつくる」といった、開戦の原因や当時の国際情勢を基に、意見を考えることができた生徒は37人中20人であった。そのため、よりよい社会を考えるために、異なる意見をもっている生徒同士の話し合い活動を設定し、意見は違っても共感できる考え方(=課題解決に向けて必要な考え方)に気付くことができるようにする工夫が必要だと考える。



【資料5 第一次世界大戦から学ぶ、よりよい社会の在り方を考える記述分析】

Ⅳ 第1次授業研究（6月）

- 1 単元 第二次世界大戦と人類への惨禍
- 2 単元の目標

日本が太平洋戦争へと向かっていく過程を、「経済」「政治」「軍事」「外交」の相互関係に注目して、各種資料で調べ、戦争に至った原因を捉える。戦争を回避できなかった構造を捉えることを通して、国際平和の在り方を考えることができるようにする。

3 検証項目

- (1) 「社会の構造を分析する段階」において、社会の構造を可視化させることは、社会的事象を理解する上で有効か、太平洋戦争の開戦理由の記述内容からつかむ。
- (2) 「解決を考える段階」において、社会の構造を根拠とした課題解決の糸口を考え、話し合い活動を設

定し、課題の解決に向けて大切にすべき考え方に気付くことは、よりよい社会を考える上で有効か、平和の実現に向けて大切にすべき考え方についての記述内容からつかむ。

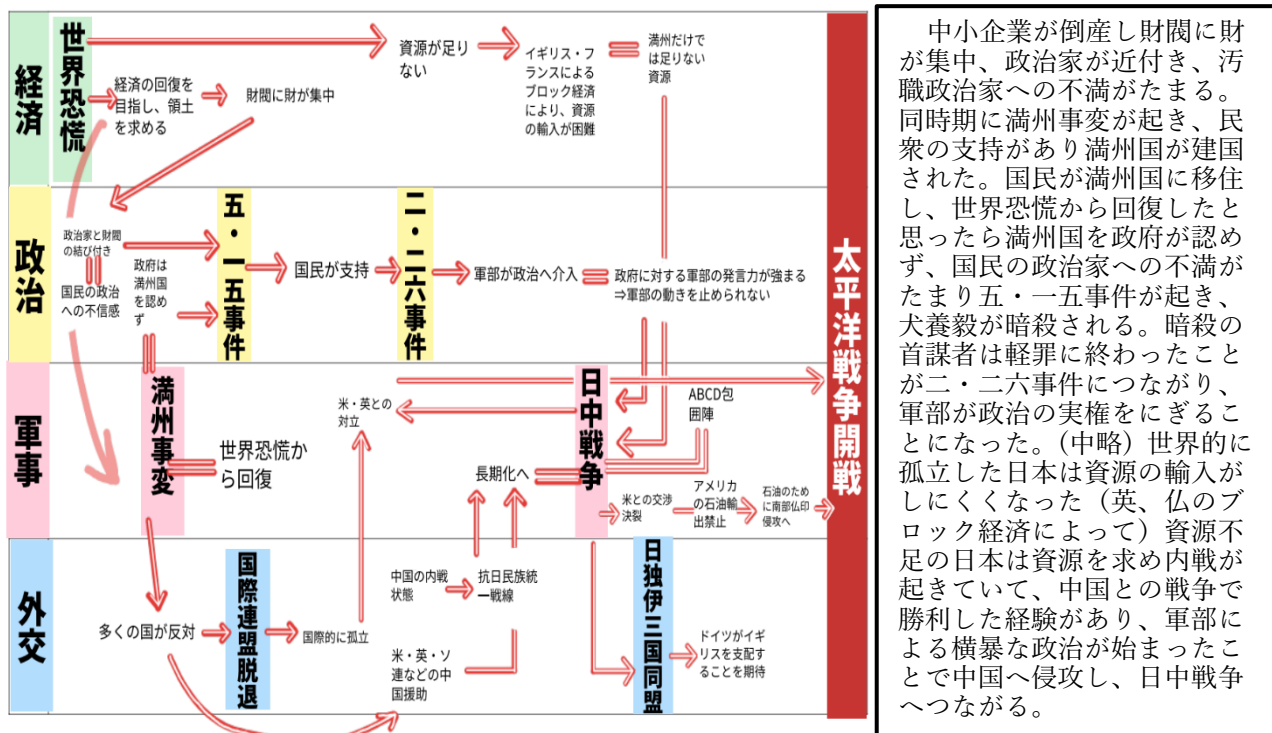
4 実践の概要（8時間完了）

(1) 単元の概要

段階	時間	学習活動
課題を捉える	1	<ul style="list-style-type: none"> 日本とアメリカの当時の国力の差を調べ、なぜ日本は太平洋戦争の開戦に至ったかについて疑問をもち、どうすれば回避できたか、学習課題を捉える。 <p style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">学習課題：太平洋戦争に至った最大のターニングポイントとは？</p>
社会の構造を分析する	2～6	<ul style="list-style-type: none"> 世界恐慌、満州事変、五・一五事件、二・二六事件、日中戦争、日独伊三国同盟について調べ、それぞれの出来事の原因と結果をウェビングマップにまとめる。 各出来事のウェビングマップを基に、「経済・政治・軍事・外交」の各視点の要因が複雑に絡み合って太平洋戦争開戦に至った構造を可視化するため、「構造分析シート」を作成する。【検証場面1】
解決を考える	7～8	<ul style="list-style-type: none"> 「構造分析シート」を根拠にして、学習課題についての考えをまとめる。 異なる意見をもつ生徒との話し合いを通して平和の実現に向けて大切にすべき考え方をまとめる。【検証場面2】

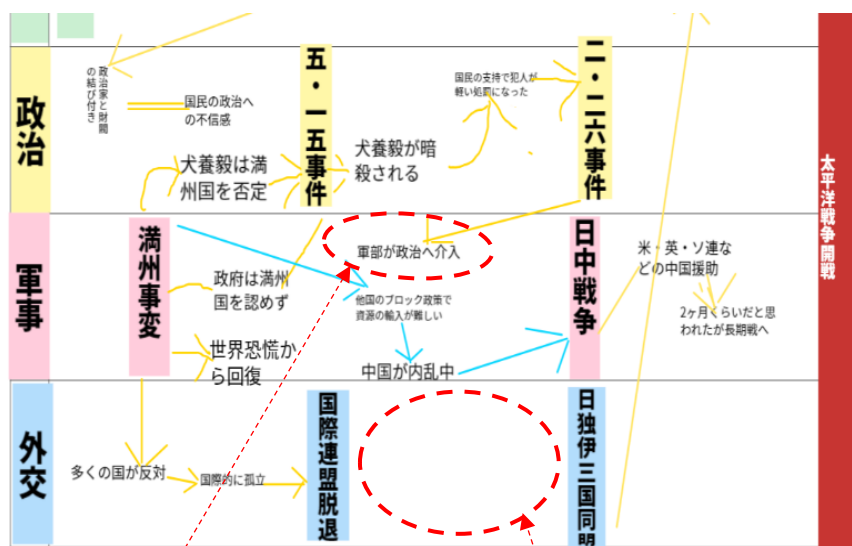
(2) 検証場面1

太平洋戦争開戦に至った理由を、様々な出来事の関連性に注目して考えるために、「構造分析シート」を用いた。出来事の相関関係を表すものは＝(等号)で、因果関係を表すものは→(矢印)で表した。視点(経済・政治・軍事・外交)同士の新たな関連性はないか、つながりに論理の飛躍がないかを確認するために、前時までの学習の中で書きためてきた互いの「構造分析シート」を評価し合う活動を設けた後、太平洋戦争開戦の理由を個人でまとめた。生徒Aは「構造分析シート」を活用し、開戦の理由を「世界恐慌(経済)」を背景として、民衆が政治家へ抱いた不信感という当時の社会背景に触れながら、「満州事変(軍事)」「五・一五事件(政治)」へのつながりを記述することができた。また、「日中戦争(軍事)」の理由を、「国際社会からの孤立(外交)」、「二・二六事件(政治)」による政治体制の変化、「世界恐慌(経済)」による貿易の制限、といった様々な視点に目を向けながら記述することができた。「経済」・「政治」・「軍事」・「外交」といった視点の関連性に注目し、そのつながりの背景を明確にしながらか開戦理由を記述することができた【資料6】。



生徒Cは時間内に「構造分析シート」を最後まで書き上げることができなかつたため、他の生徒の「構造分析シート」も参考にしながら開戦の理由をまとめた。

「二・二六事件」から「日中戦争」の関連性や「国際連盟脱退」から「日独伊三国同盟」とのつながりが図示できていないため、太平洋戦争の開戦理由において、日中戦争というキーワードを用いて記述できておらず、また、連盟脱退と日独伊三国同盟とのつながりも記述できなかった。「構造分析シート」に語句のつながりを図示できなかった所は、各視点の関連性を理解できていないため、語句の羅列にとどまり、太平洋戦争開戦の理由を構造に注目して記述することができなかった【資料7】。



『二・二六事件』から伸びた矢印が『日中戦争』につながらっていない。
 国際連盟脱退がどの出来事にもつながっていない。

世界恐慌で崩れた日本の経済を直すために行った満州国を反対していた犬養毅が暗殺された。だが、国民が支持していたため、国際連盟から脱退した。似たようなことをしても罰が軽くなるから軍部が政治に介入し政治家の立場がなくなった。その後、日本が日独伊三国同盟を結んでアメリカからの石油の輸入を禁止されてしまったがドイツとイタリアと組んで真珠湾を攻撃したことにより太平洋戦争が起こった。

【資料7 生徒Cの「構造分析シート」と太平洋戦争の開戦理由の記述(一部抜粋)】

(3) 検証場面1の成果と課題 (○：成果、●：課題)

A(十分満足できる)	B(おおむね満足できる)	C(努力を要する)
「構造分析シート」を基に、複数の関連性を明確にした上で太平洋戦争開戦の理由を記述することができている。	「構造分析シート」を基に、複数の関連性に触れた上で太平洋戦争開戦の理由を記述することができている。	「構造分析シート」を基に、複数の関連性に触れた上で太平洋戦争開戦の理由を記述することができていない。
33人		7人(生徒C)
10人(生徒A)	23人(生徒B)	

- 「構造分析シート」において、社会的事象の関連性を、要素に分解してその関連性を可視化することで、視点同士のつながりを理解することができ、複数の視点から太平洋戦争開戦の理由を構造に注目して理解することができた。
- 「構造分析シート」を正確に図示できなかった生徒がいた。生徒が一つ一つの出来事の関連性を考えるまでの知識の確認が足りず、生徒の理解力に合わせた支援がなかったためだと考える。

(4) 検証場面2

平和の実現のために大切にすべき考え方を生徒がまとめるために、「構造分析シート」を根拠にしながら、太平洋戦争に至った最大のターニングポイントを考えた。その後、考えが異なる生徒と話し合いながら、異なる意見を越えて共感することができた考え方を見いだした。話し合いでは、「世界恐慌がその後の出来事の全ての出来事に影響を与えた」「軍部が政治への発言力を増したことが戦争を招いた」といった意見に共感していた生徒が多かった。その後、学級全体で、大切にすべき考え方として、「経済的な不安の解消」「主義の違いによる外交的対立を避ける(国際協調を図る)」「政治の安定を図る」「国民が戦争を支持しない」を確認した。この考え方を参考にしながら、生徒が個人で「平和の実現のために大切すべきこと」を文章でまとめた。生徒Aは複数の考え方の意味を理解し、将来の社会の様子を踏まえなが

ら、記述することができた【資料8】。

一番大切なのは各国の経済的な問題を戦いによって解決しないこと。ただ、そういう国の代表を選ぶのは国民だから、国民が選挙でこの人なら大丈夫という人に任せることが大切だと思う。周りの意見に流されずに、個人の意見を大切に投票することが大切だと思う。今後、世界の人口が今よりもっと増えると思うので、今よりたくさんの方々の考え方が出てくると思う。その考え方を受け入れたら、時には否定して考えを修正したりしながら世界で協力して問題を解決することも大切だと思う。中には意見がぶつかり合うこともあるだろうが、その時に選ぶ解決の方法を一つ一つ間違わないように選んでいくことで、問題の解決の方法がよりよくなっていくと思う。これまでした戦争の原因について確かな知識を身に付けて、戦争がどのような結果になったのかも知っておく必要があると思う。

(凡例 _____ : 経済的背景 _____ : 政治の安定 _____ : 国際協調)

【資料8 生徒Aの「平和の実現のために大切にすべきこと」の記述内容（一部抜粋）】

しかし、生徒B・Cは、複数の考え方ではなく、一つの考え方でしか記述できなかった【資料9】。

生徒B：意見が国によって違うのだからその国でしか分からないものだからその国の意見を完全否定しないように互いを理解することは大切だと思う。それぞれの国の考え方を受け入れて、自分たちの主義主張を押し通して対立するのは避けることが必要。

生徒C：経済の不況を乗り越えるために各国がいろいろな政策を出しているが、一つの国だけではなくいろいろな国と乗り越えればよい。一つの国が乗り越えられないとその国の資源がなくなり他国に攻めるしか方法がなくなり、結局戦争に発展してしまう。

(凡例 資料8と同じ)

【資料9 生徒B・Cの「平和の実現のために大切にすべきこと」の記述内容】

(5) 検証場面2の成果と課題 (○：成果、●：課題) 3人欠席

A(十分満足できる)	B(おおむね満足できる)	C(努力を要する)
学級全体で確認したよりよい社会の実現のための考え方を複数踏まえた上で、将来を見通し、平和の実現に向けての方向性を記述することができている。	学級全体で確認したよりよい社会の実現のための考え方を複数踏まえた上で、平和の実現に向けての方向性を記述することができている。	学級全体で確認したよりよい社会の実現のための考え方を複数踏まえた上で、平和の実現に向けての方向性を記述することができていない。
28人		9人(生徒B・C)
7人(生徒A)	21人	

○ 28人が平和の実現に向けて複数の視点から考えることができた。これは、異なる意見同士の話合い活動を設定し、異なる意見を越えて共感することができた考え方を確認したことで、複数の視点から社会の課題を考えることができたからだと考える。

● 複数の考え方を踏まえて考えることができていない生徒がいた。学級全体の話合いで、共感する考え方を確認したため、一部の生徒の考え方を全体の場で確認しただけにとどまっており、生徒一人一人がよりよい社会の実現のために必要な考え方をまとめることができなかったためだと考えられる。

V 長期研修で学んだこと

1 宮崎大学 教授 吉村 功太郎 氏

よりよい社会の在り方を考える際に重要なのは、生徒がもつそれぞれの意見の背景にある価値観を明確にしておき、どのような価値観で対立が起きているのか、論点が何かはっきりすると、よりよい社会の在り方を考えるための共通の価値観が見だしやすくなることを学んだ。また、「よりよい社会」の一つの方向性としては、一人一人が見識ある市民として、「私」の自己利益のみの追求に陥ることなく、また、「私」を犠牲にし、「社会」のみの利益を追求することではなく、「私」の利益が「社会」の利益とつながっていることを自覚し、そのような他者の存在に思いをはせるような「公共的精神」をもつことであることも学んだ。そのような「公共的精神」を育むことも社会科の授業の役割であると教えていただいた。

2 静岡大学 准教授 山本 隆太 氏

システム思考の考え方の基本は、全体像の構造を明らかにし、社会全体を俯瞰して見ることができる点であり、それぞれの生徒が社会をどのように見ているのかを知ることができる。そして、生徒それぞれがまとめた図を互いに見ることで、様々な社会の見方があることにも気付くことができるのが、社会科の授業においてシステム思考を活用する意味であると教わった。構造分析を行うために思考を可視化する注意点としては、多角的な見方が抜け落ちやすくなるため、図の中に立場を強調した情報を入れ込むことで、多面的な分析だけでなく、多角的な分析が可能となることを学んだ。

3 桐蔭学園高等学校 教諭 長谷川 正利 氏

構造分析を行うために中学生の発達段階を考慮すると、変数(要素)を教師が与えることは必要であり、変数の因果を考えることに集中させることが構造分析を行う上で考えるべきことであると教えていただいた。また、生徒の社会認識によって、因果のつながり方は変わってくるため、「なぜそのような図示の仕方をしたのか、何を根拠にしたのか」という視点で相互交流・相互評価をすることが、大切であることを学んだ。

VI 第2次授業研究に向けての改善点

1 検証項目1について

「構造分析シート」を作成する際に、多角的な視点を踏まえて構造を分析できるように、「構造分析シート」の中に「誰」にとって「どのような」影響を及ぼすか、という内容を記述することで、より生徒が社会的事象の構造を理解できるようにする。また、シートの作成が困難な生徒に対する支援として、シートをまとめる際の要素(キーワード)を教師から提示するようにする。

2 検証項目2について

生徒一人一人が学級全体での話し合いを振り返り、同じ意見同士で小グループを作り、小グループで異なる意見について吟味し、異なる意見を越えた共通の考え方を話し合うことで、生徒一人一人がよりよい社会の実現に向けて大切にすべき考え方をまとめることができるようにする。

VII 第2次授業研究(10月)

1 単元 「民主政治と政治参加」

2 目標

若年層が積極的に政治に関わることができている構造を理解することを通して、主体的に政治に参加する自覚と、よりよい民主主義の在り方を考えることができるようにする。

3 検証項目

- (1) 「社会の構造を分析する段階」において、「構造分析シート」に立場を意識した項目を記述し、社会の構造を可視化させることは、社会的事象を理解する上で有効か、若者の政治的関心の低下の理由についての記述内容からつかむ。
- (2) 「解決を考える段階」において、学級全体の話し合い活動を行った後、学級全体の話し合いを振り返り、異なる意見を越えた共通の考え方を小グループで話し合う活動の設定は、よりよい社会を考える上で有効か、よりよい民主主義社会の在り方についての記述内容からつかむ。

4 実践の概要(6時間完了)

(1) 単元の概要

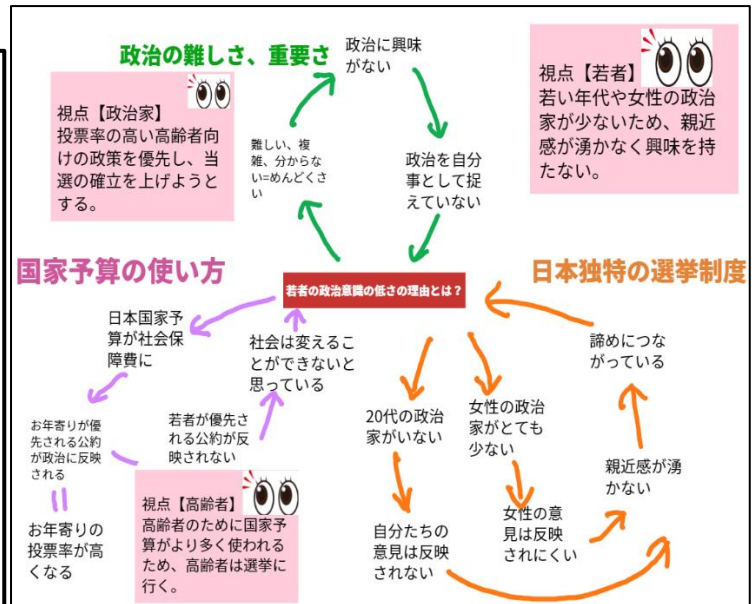
段階	時間	学習活動
課題を捉える	1	<ul style="list-style-type: none">若者の投票率が低いことが日本の社会に与える影響や、生徒たちの世代の将来に与える影響を考慮することを通して、学習課題を捉える。 学習課題：若者の積極的な政治参加を実現するために解決すべき課題は何か。

社会の構造を分析する	2～4	<ul style="list-style-type: none"> ・ 新聞記事や統計資料を基に、若者の政治的関心の低下の背景をウェビングマップにまとめる。 ・ ウェビングマップを基に、若者の政治的関心の低さを招いている構造を可視化するため、「構造分析シート」を作成する。【検証場面1】
解決を考える	5～6	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「構造分析シート」を根拠にして、学習課題についての考えをまとめる。 ・ 異なる意見をもつ生徒との話し合いを通して、よりよい民主主義社会の実現に向けて大切にすべき考え方をまとめる。【検証場面2】

(2) 検証場面 1

若者の政治的関心の低下の理由を、要因の関連性から理解するために「構造分析シート」を用いた。資料から分かる様々な要因を「原因→結果」の因果関係に注目することで、負の循環が起きている状況を図示した。負の循環が「誰に」「どんな影響」を与えるかを追記することで、より多くの立場と様々な要因との関連性に注目した上で、若者の政治的関心の低下の理由を構造に注目してまとめることができた。

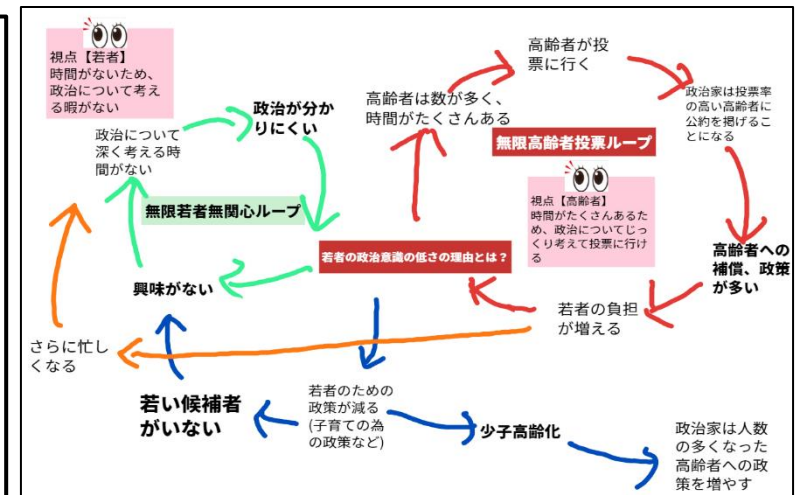
予算の使い道の多くが社会保障費なので高齢者が選挙に行きやすくなる公約ばかりが優先されている。その結果、もっと暮らしやすい世の中にするために、高齢者の投票率は高くなる。しかし若者へのお金の使い道が少なく、若者が優先される公約が政治に反映されなくなる。その結果自分たちの意見は通らず、社会を変えることはできなってしまう人が多くなり投票率が低くなる。政治家に20代の政治家、女性の政治家が少ない。これは日本独自の選挙制度が関係している。若い政治家、女性の政治家がいないことによって親近感が湧かず、若者の考えや女性の考えが通らなと感じてしまい、諦めにつながっているのが投票率が低くなっている。



【資料 10 生徒Bの「構造分析シート」と若者の政治的関心の低さの理由の記述（一部抜粋）】

生徒Bは、「若者」「高齢者」「政治家」といった立場を踏まえながら、若者が社会を変えることができなってしまう理由や、政治に対して親近感が湧かない理由を、負の循環に注目してまとめることができた【資料10】。また、授業の中で「構造分析シート」の作成が難しかった生徒Cに対しては、ウェビングマップを作成した際に多くの生徒が記述していた要素である、「分かりにくい」「興味が無い」「少子高齢化」「高齢者向けの政策が多い」「若い候補者がいない」という要素を提示したところ、その語句を手掛かりにして「構造分析シート」を作成し、若者の政治的関心の低さの理由を構造に注目して記述することができた【資料11】。

投票しようとしても、若者の世代にあった政治家がいないため、投票したい人がいない。しかも、高齢者の方がそもそも数が若者よりも多く、高齢者の方が投票率が高いので、あまり自分の意見が反映されなと思う。意見が反映されにくいから、若者世代の生活は苦しくなりやすく、より働くので、時間が高齢者よりは少なくなり、考える時間が少ない。つまり、政治に興味が湧かないようになってしまふ。



【資料 11 生徒Cの「構造分析シート」と若者の政治的関心の低さの理由の記述（一部抜粋）】

(3) 検証場面 1 の考察 (3 人欠席)

A(十分満足できる)	B(おおむね満足できる)	C(努力を要する)
「構造分析シート」を基に、複数の関連性を明確にした上で若者の政治的関心の低さの理由を考慮することができている。	「構造分析シート」を基に、複数の関連性を踏まえた上で若者の政治的関心の低さの理由を考慮することができている。	「構造分析シート」を基に、複数の関連性を踏まえた上で若者の政治的関心の低さの理由を考慮することができていない。
34 人		3 人
16 人 (生徒 A・B)	18 人 (生徒 C)	

生徒 B・C のように、多くの視点の関連性に注目し、負の循環に気付いた上で、若者の政治的関心の低さの理由を考慮することができている生徒は 37 人中 34 人であった。これは、立場を意識した「構造分析シート」の改善により、「誰にとって」「どんな影響」があるかを考えやすくなり、関連性を見いだしやすくなったこと、また、図を作成することが難しいと感じている生徒に対して要素を提示することで、要因同士の関連性を考えやすくなったことが挙げられる。

(4) 検証場面 2

よりよい民主主義社会の実現に向けた大切にすべき考え方をまとめるために、生徒が作成した「構造分析シート」を基に、若者の積極的な政治参加を実現するための解決の糸口として、「政治を身近にする」「高齢者と若者の世代間の 1 票の格差を解消する」「若者・女性議員を増やす」の異なる意見に分かれて、学級全体での話し合いを行った。話し合いの最後では、異なる意見をもった生徒の考えを越えて共感することができた考え方を見いだすために、同じ意見をもっている生徒同士で小グループを作り、学級全体での話し合いを振り返りながら、よりよい民主主義社会の実現のために大切にすべき考え方を話し合った。学級全体で見いだした、よりよい民主主義社会の実現のために大切にすべき考え方として、「国民が政治に対してより正しい判断力をもって関心をもつ」「政治の側も国民に対して分かりやすく情報を発信する」「あらゆる人々の権利を考える」「みんなでよりよい社会を考える」を確認した。この考え方を参考にしながら、生徒が個人で「よりよい民主主義社会の実現に大切にすべきこと」を文章でまとめた。生徒 C は学級全体で見いだした考え方を根拠として、複数の考え方の意味を理解し、記述することができた【資料 12】。

若者が政治に興味関心をもつことができるためには、情報の発信を含めて、やっぱり国全体で何かしら政策をしないとイケない。お互いが関心をもちあうことができると政治はいい方向に向かうと思う。若者や高齢者などあらゆる人権を意識して政策をつくる(平等権などを侵害してまで制度を変える必要はない)国民は有権者として、不満なところや改善案など様々なことを発信、自分事として考えることが大切だと思う。
 (凡例 _____ : 政治側の発信 _____ : 様々な立場の尊重 _____ : 国民の政治意識)

【資料 12 生徒 C の「よりよい民主主義社会の実現のために大切にすべきこと」の記述内容】

(5) 検証場面 2 の考察 3 人欠席

A(十分満足できる)	B(おおむね満足できる)	C(努力を要する)
学級全体で確認したよりよい社会の実現のための考え方を複数踏まえた上で、将来を見通し、よりよい民主主義社会の実現に向けた方向性を記述することができている。	学級全体で確認したよりよい社会の実現のための考え方を複数踏まえた上で、よりよい民主主義社会の実現に向けた方向性を記述することができている。	学級全体で確認したよりよい社会の実現のための考え方を複数踏まえた上で、よりよい民主主義社会の実現に向けた方向性を記述することができていない。
34 人		3 人
11 人 (生徒 A)	23 人 (生徒 B・C)	

生徒 C は、学級全体で確認したよりよい社会の実現のために大切にすべき考え方を複数踏まえた上で、考えを記述することができた。これは、異なる意見同士の話し合い活動を設定し、異なる意見を越えて共感することができた考え方を確認したことに加え、同じ意見をもっている生徒同士で学級全体での話し

いを振り返る小グループでの話し合いを設定したことで、一人一人の生徒がよりよい社会の実現のための考え方を、一度立ち止まって考えることができたからだと考える。また、振り返りのアンケート、「よりよい社会の在り方を考える上で参考になったことは何ですか？」の問いに「同じ意見同士での小グループでの話し合いの振り返り」を選んだ生徒が 37 人中 25 人いたことから、小グループを作り、学級全体での話し合いを振り返る活動を設定したことが効果的であったと考える。

VIII 研究のまとめ

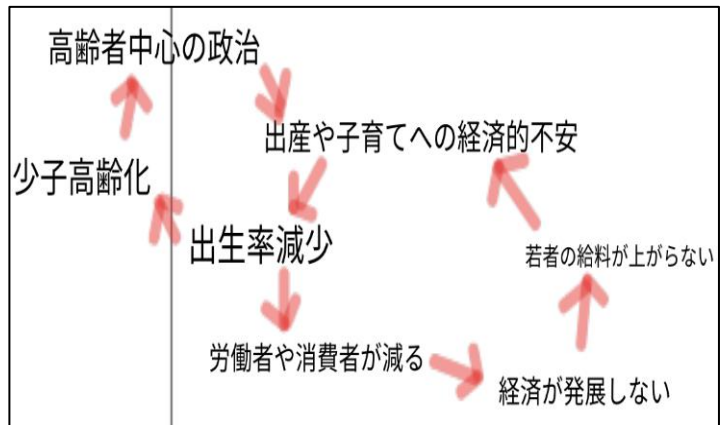
1 研究から明らかになったこと

(1) よりよい社会を考える生徒の育成

授業研究を通して、よりよい社会の実現のために大切にすべき考え方を複数踏まえた上で、考えを記述することができた生徒は 37 人中 34 人いた。このことから、社会的事象の複雑な構造と、立場への影響を「構造分析シート」で可視化しながら社会の課題の原因を捉えた上で、課題解決の糸口を話し合うことを通して、学級全体でよりよい社会を構想するために必要な考え方をまとめることは、社会の構造を捉え、よりよい社会を考えることができる生徒を育てることに有効であることが明らかになった。

(2) 実践後の生徒の様子

第 2 次授業研究後の単元「少子高齢化と財政」では、政府が行っている少子化対策の評価活動を行った。【資料 13】は実際の授業の中で、ある生徒が調べ学習のワークシートに記述した図である。教師側から特に指示がなくても、少子化の進行に歯止めがかからない状況の構造を分析していることが分かる。社会の課題を構造的に分析した上で課題解決を目指そうとする生徒の姿が見られた。授業の中では、この生徒のように、社会の課題を



【資料 13 生徒が少子化の構造を分析した図】

表面的に捉えるのではなく、その背景にある様々な要因の関連性を捉えながら考える生徒がほとんどであった。その際に多くの立場に目を向けながら考えたり、今まで習ってきたことを根拠にしながら、既習内容と今学習している内容の関連性に注目したりしながら学習を進めようとする生徒の姿に、研究の成果が表れていることを感じた。

2 今後の研究に向けて

システム思考の考え方は「構造的な理解」と共に、「全体を動的に捉えるアプローチ」があり、何か一つの解決策を考えることで、システム全体がどのように動き、多くの立場にどのような影響を与えるのか、という点にまで踏み込んで社会の課題解決を図る考え方である。本研究では、「構造的な理解」を通じた解決の糸口を考えながら、よりよい社会の在り方を考える生徒の育成を図ることはできたが、今後は考えた解決の糸口にどのような作用を加えるとよいか、考えた解決策がその後の社会全体にどのような影響を与えるか、という点にまで踏み込んだ学習を展開することで、現実社会に即した「よりよい社会」を考えることにつながると考える。中学生という発達段階に十分配慮した上で、システム全体の動きを分かりやすく把握し、未来予測ができる学習活動の工夫やワークシートの工夫を中心に研究を進めていきたい。

参考・引用文献 ダニエル・ゴールマン ピーター・センゲ

『21 世紀の教育—子どもの社会的能力と EQ を伸ばす 3 つの焦点—』ダイヤモンド社 (2022)